

「はあ、はあ♡ 男子トイレの中でオナニー気持ちいい♡」

「ビキビキにそそり立った、ふたなりチンポお、ここで扱くのお、たまらなく興奮するっ♡ あう、あうっ、カウパー、びゅっくびゅくう、噴きあがつてえ、射精しそうっ♡」

「ここ、ボクのお気に入りの異界領域の一つになりそうッ♡ もし、男子が入ってきたら、おふ、おふお、おほおっ……♡」

「絶対、異界領域から飛び出して♡ 襲つちゃうよ♡ くふ、んふう、獲物を待ちながらの、オチンポシッココッ♡♡ いいお♡♡ 気持ちよすぎィッ♡♡」

「あ……誰か来て……ふー、ふー♡……」

「あはっ♡ 開いてるよお……♡ きちんと時間通りだね。いいいいこ♡ ここに約束通り来たつてことは、くすすっ、今、キミが持つてる、その空のペットボトルのお使いも、きちんと出来たつてことだよね、えらいえらいッ♡」

「うんうん、ボクの言いつけどおりに、ペットボトルに詰めた高い濃度の妖気がたっぷり入った精液、学校中に撒いてこれたみたいだね」

「裏庭、体育館の水場、それに教室のロッカーここまで撒いておけば、校内全体が異界領域になるのも時間の問題かな」

「ボクの眷属としての役割、ちゃーんと果たせてるじゃない。んふふう。頭を、なぐでなで、いっぱい褒めてあげるね。本当によくできたね。お言いつけを守れて、えらいッ♡」

「キミと一緒に学校内に異界領域を作り始めて、もう1週間ぐらいかな。」

「妖魔にとつて、だいぶ居心地のいい空間になったよね。襲いたいときに人間を手近な領域に連れこんで、食べちゃうことまでできるしね」

「でも、ボクにとつては、やっぱりキミが一番かな。ほらあ、もつとごっちへ来て。うん、完全に異界領域に入つてきて」

「んっ、なにかなあ？ モジモジしちゃつて。」

「その、物欲しそうな視線ッ、ボクのふたなりチンポに、釘付けでっ、くふっッ、ごめんね、意地悪だったかな。ボクもキミに勃起をガン見されて、悪い気はしないよ」

「校内に異界領域を広げるお手伝いをきちんと出来た眷属くんには、きちんとトスケべなご褒美、あげないかね」

「そうだね、ボクもオナニーの最中だったし、キミも、ボクのそばにきて、うん、そうだよ」

「それじゃ、オチンポ見せて♡ ふたりで一緒に、見せあいオナニーしようよッ♡」

「恥ずかしがつてるなら、命令っ♡ 眷属くんなら、絶対服従だからね。くすすっ。もう、勃起してるよね？ その浅ましいチンポ露出して、ボクの前でシッココ、扱いてよ」

「ほら、出したオチンポをボクも抜くから、キミも♡ しゅこしゅこしゅこしゅこ♡」

「抜きながら聞いて♪ 最近、キミ、クラスの噂だよ。すごく仕草が、色っぽくなって、男子も女子も、みんな困惑してる。くすっ♪」

「ね、同級生の男子に犯されたりするところ想像して今みたく、オナニーしてるの?」

「あ、オチンポ抜く手が早くなってる〜しかも、勃起もす〜くなつて、凶星なんだ♪」

「く〜ぶぶっ、いいよ、そのまま射精しても。ボクの見てる前で、んんっ、はあはあ、しろっ、オナニーでチンポ汁う、びゅくびゅくう、出しちゃえ〜っ♡♡♡」

「あんっ、すっごい精液の量、ドロドロで濃くつてえ……ボクの眷属として、誇れるよ、んんっ……校舎の色んなところでエッチして妖気をばらまいて異界領域を広げて学校を餌場に、もっともっと楽しめるね、んんぶぶぶっ♪」

「ん、んんっ、せーし、まだ沢山溢れてえ。この量ありえないよお、はあはあ♡」

「キミ、祈祷師よりぜんぜん妖魔の方の才能があるよ♡ はあはあ、エッチにぶっかけられるの良すぎてボクもオナニーはかどうちやうっ♡♡」

「んはっ、んはあんっ、イク、イクイクう♡ ほらあ、ボクも射精するう♡♡」

「んああッ♡ んっはあああーッ♡♡♡」

「んんっ、はあはあ、ザーメンぶっかけえ、気持ちいい〜く〜ぶぶっ、キミもボクのせーしまみれで、すっごくアつた顔しちゃってる。かわいい〜♡」

「じゃあ、邪魔な服も消しちゃおっか♪ これで全裸になって、マゾ眷属くんらしい格好だね。ほらあ、こうちにきて。んぶっ、お待ちかねの本番、しよう♪」

「このまま便座に座ったボクに跨って、んんっ、そう、腰を下ろしていつて♡ あ、ああ、奥までえ、ずっぽり入っちゃったね」

「ね、言うの忘れてたけど——放課後だけど、まだ時間が早くて、校舎内に残ってるコもそこそこいるし、もしかしたら、このトイレに入ってくるかも♡」

「ね、ボクに犯されると、見られたい?」

「んんぶ、黙ってないで教えてよ」

「て、話をしたら、誰か入ってきたね」

「今、ボクらは異界領域の中にいるから、向こうから、こっちは見えないけど。でも、見られながらするの気持ちいいよ」

「否定してもダメ。キミのアナル、きゅうつて締まって見られたと想像して、興奮してるね。ん、んん♡」

「いっそ異界領域を解いて、ボクらのセックスちゃんと見てもらう?」

「ボクはどっちでもいいよ。人間の良識がまだ残ってるキミのほうが、断然、恥ずかしいはずだけど〜」



「ボクも一緒にイクからっ、キミに種付けえ、するうっ♡♡」

「あくっ♡ んくうッ……あつくうううううっ♡♡♡♡」

「んんんっ、イったケツまんこに射精いっ♡」

「はあっ、気持ち良すぎいい……♡」

「出してる間も、ずっとお尻の穴、きゅんきゅんしてえ、精液バキュームしてくれて、まだイったままなんだね♡」

「んふ、くぶっ……キミもよくなったみたいでえ、はあはあ、ボクもうれしいよ♡」

「眷属くんを良くしてあげるのは、主人であるボクの役目だから♡」

「けど、キミってば、本当にエロくっつてアナル肉便器になるために生まれてきたようなマツだよ。これからもいっぱいエロ可愛がってあげるよ、んふっ♪」